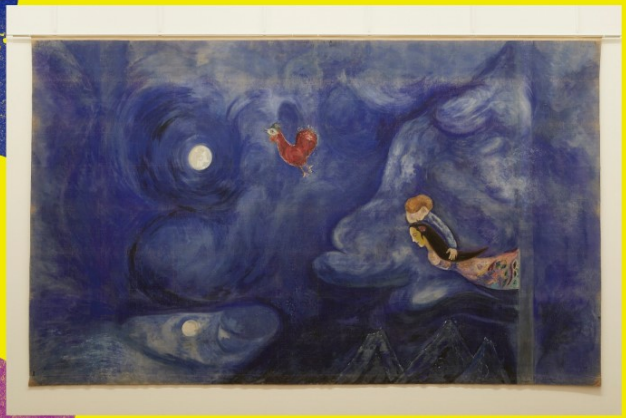
青森県立美術館でよみがえるバレエ「アレコ」

Reimagined by Aomori Museum of Art : The ballet *Aleko*

青森県立美術館の中心にある四層吹き抜けの大空間、アレコホールと名付けられたこの大きなホールには、20世紀を代表する画家、マルク・シャガール(1887-1985)によるバレエ「アレコ」の背景画が展示されています。青森県は1994年に、全4点から成るこの背景画中、第1、第2、第4幕を収集しました。残る第3幕の背景画は、アメリカのフィラデルフィア美術館に収蔵されていますが、同館からの長期借用が認められ、現在全4点が当館のアレコホールに展示されています。縦約9m、横約15mの大画面にあふれる鮮やかな色彩の中で、シャガール独特の幻想の世界が、バレエのストーリーに沿って展開します。シャガールの色彩に囲まれたこのアレコホールの魅力を存分に引き出すべく、このたび青森県立美術館版バレエ「アレコ」を開催します。ドラマチックな照明と音楽、そして華やかな衣裳をまとった躍動するダンサーたち。全4点が一堂に会したこの機会に、「アレコ」の背景画に再び舞台美術としての命を吹き込みます。



第1幕《月光のアレコとゼンフィラ》1942年/テンペラ・綿布

バレエ「アレコ」舞台背景画とは

帝政ロシア(現ベラルーシ)のユダヤ人の家庭に生まれたマルク・シャガールは、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れるためにパリからアメリカへと渡り、そこで7年間の亡命生活を送っています。バレエ「アレコ」の背景画は、その間に、ニューヨークのバレエ団「バレエ・シアター(現アメリカン・バレエ・シアター)」から依頼を受けて制作されました。
舞台美術全体を委ねられたシャガールは、背景画だけでなく数々のダンサーの衣裳もデザインしています。

シャガールの類まれな色彩感覚と想像の力が遺憾なく発揮され、あたかもその幻想的な絵画世界に迷い込んだかのような強烈な印象を与えるステージは、公演当時、観客や批評家から高く評価されました。ブランクを挟みながらも1960年代後半まで続いた「アレコ」上演の度に用いられたこの背景画ですが、1977年に「バレエ・シアター」が手放してからは美術作品として新たな道を歩み始めました。

第2幕《カーニヴァル》1942年/テンペラ・綿布

あらすじ

文明社会に嫌気がさし、
自由を求めてロマの一団に加わった
ロシアの青年貴族アレコは、
ロマの娘、ゼンフィラと恋に落ちる。
しかし、奔放なゼンフィラはすぐに
別の若いロマの男へ心を移してしまう。
ゼンフィラ達の逢瀬を目撃したアレコは、
嫉妬のあまり錯乱状態に陥り、
手にナイフを握りしめる・・・

第3幕《ある夏の午後の変転》1942年/テンペラ・綿布　フィラデルフィア美術館

見どころ紹介

Point:1
シャガールの世界とシンクロするバレエ

アレコの心情の揺れ動きに焦点を当てるドラマティックな宝満直也の振付が、
公演中、観る者に息つく間も与えないほどの圧倒的迫力で迫る。
背景画の色彩のまどろみが、
そのままアレコの心情のうねりを表すように、
背景画と踊りが一体化する、
アレコホールでのみ実現できるバレエ。

第4幕　《サンクトペテルブルクの幻想》1942年/テンペラ・綿布

Point:2
アレコ役に挑む大川航矢

主演を務めるのは、青森県が誇るバレエダンサーの一人である大川航矢。
これまでロシアで活躍し、高い跳躍力を生かして明るい役を演じることが多かった彼が、
本公演で新境地に挑戦。

Point:3
本公演のために編曲されたチャイコフスキーの音楽

音楽は、バレエ「アレコ」公演(1942-1968)の際に使用されたチャイコフスキーの原曲を、本公演用に新しくオーケストラ版として編曲。音楽とストーリーが完璧に調和した振付により、観る者が「アレコ」の世界に自然と溶け込んでいく。

音楽の視聴はこちら

Point:4
シャガールがデザインした衣裳を製作

シャガールによる衣裳デザイン画を参考に新たに衣裳を製作。背景画とダンサーがまとう衣裳の融合にも注目。

左:アレコ(第1幕)
1942年/グァッシュ、水彩、ウォッシュ、ブラシ、鉛筆・紙
右:ゼンフィラ(第1幕)
1942年/グァッシュ、水彩、ウォッシュ、ブラシ、鉛筆・紙

©2024. Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

©ADAGP, Paris&JASPAR, Tokyo, 2024, Chagall® E5597